

## 一峯和尚〈いっぽうおしょう〉さんのかご（城東町）

むかし、後川〈しつかわ〉の清陰寺〈せいいんじ〉に一峯という、たいへんかしこいお坊さんが住んでいました。

ある日、かごに乗って、隣村のお寺まで出かけました。暖かい小春日和〈びより〉でしたので、かごの中でうつらうつらと居眠りしていました。かごは、後川峠を越え、日置、八上を通して篠〈ささ〉山城下までやって来たのですが、お城から見ていた家来〈けらい〉の一人が、このかごを見つけて、びっくりしてしまいました。それは、篠山城下をかごに乗って、通ることは、かたく禁止〈きんし〉されていましたからたいへんです。さっそく、お殿様〈とのさま〉に申しました。

「お殿様、たいへんでございます。かごに乗った和尚〈おしょう〉が城下を通っています。」

と顔色をかえて、ふるえながら申しました。

お殿様も大そうびっくりされ、

「それは、けしからん、さっそく呼んで参れ。」

と、かんかんです。

家来は、一峯さんの所に行って、

「お殿様のお呼びじゃ、すぐ参れ。」

とことば荒々しくどなりつけました。かごかきはびっくりして、どうなることかとふるえています。いつ、切られるかわかりません。かごの中で、じっとこの様子を聞いていた一峯さんは、すました顔で

「かごかきさん、いいから、いいから、このままでお城まで行ってください。」

と、平気なものです。

お殿様の前に呼び出された一峯さんは、すました顔でたずねました。

「何か、ご用ですかな。」

お殿様は、まっかな顔をしておこりました。

「この城下を、かごに乗って通るとは何ごとじゃ。」

と、にらみつけましたが、なおも一峯さんは笑いながら、ふところから何やら取り出して、

「はい。この通りでございます。」

と、お殿様に見せました。お殿様は、巻物〈まきもの〉を読んでいくうちに見る見る顔色が青くなり、家来に、

「その和尚を早よう帰らせ、帰らせ。」

と、ふすまの戸をびしゃりと閉めてしまいました。

一峯さんは、お殿様が青くなった様子を思い出して、にこにこしながら、お城を出て行きました。外で待っていた、かごかきさんは、お城の中で一峯さんが、どんなにひどいめにあっているか、と、心配で心配でたまりません。そこへ、にこにこ顔で出て来たものですから、何が何やらさっぱりわからず、

「和尚さん、どうでしたか。」

と、かけ寄り、たずねました。

「いやいや、どうも長い間待たせたかなあ、すまん、すまん。」

と、お殿様にお見せした巻物は、京都の二条殿より出された大切なものだったので、

いまでも、この巻物とかごは、後川の清陰寺に大切にされて残されています。

